

# 太宰治の《苦悩》の再解釈

## －「ヴィヨンの妻」と「母」と「父」を中心に－

金柰炅\*  
nakyungsssem@naver.com

### <目次>

- |                 |                     |
|-----------------|---------------------|
| 1. はじめに         | 2.2 《涙》の母像          |
| 1.1 同時代評論       | 3. 《苦悩》から見えてくるもの    |
| 1.2 問題提示と研究目的   | 3.1 「ヴィヨンの妻」における《神》 |
| 2. 主人公から見られる父母像 | 3.2 「父」における《義》      |
| 2.1 自己中心の父像     | 4. おわりに             |

主題語: 意地(will)、革命(revolution)、向き合う(face-to-face)、戦後(postwar)、神(God)、義(righteousness)

## 1. はじめに

「ヴィヨンの妻」は昭和22年3月号の『展望』に発表され、発表当時から高く評価され、無頼派の代表作として読まれていた。「ヴィヨン」とは、フランスの十五世紀の詩人のことであり、殺人、窃盗、賭博、入獄、悪徳に構えられた生涯を送った人である。彼は自ら犯した悪徳への反省や悔恨、懺悔の感情などを詩に読み、太宰は頹廢的な詩人とも言える彼の詩句をよく引用していたと言われている。

昭和21年10月24日、太宰は伊馬春部宛に《12月頃から「展望」の百枚くらゐの力作小説に取りかかるつもり》りであると送っている。日付は不詳ではあるが、12月辺りに太田静子宛に次のように手紙を出し、執筆時期が分かる。

きのふから「ヴィヨンの妻」といふ百枚見当の小説にとりかかつてゐます。一月十五日までに書き上げなければならず(展望といふ雑誌)いま近くに仕事部屋を借りて仕事をしてゐます。

---

\* 仁済大学校 日語日文学科 時間講師

1) 太宰治(1963)『太宰治全集第9巻』『第11巻』筑摩書房。以下、本文の注釈は省略する。

次作の「母」も同年3月号の『新潮』に発表され、「ヴィヨンの妻」と同時発表となる。山内祥史<sup>2)</sup>は「解題」で「昭和二十一年十月十五日、葛西久二促され、市前昌志の招きに応じて、葛西久二ともに鰯ヶ沢町天竜山傍の料亭水天閣を訪れ、その折の体験を主な素材として記されたもの」と述べ、太宰の実体験から書かれた作品であることが分かる。3作目の「父」は同年4月号の『人間』に発表され、22枚ぐらいの短編である。山内祥史<sup>3)</sup>は「解題」で当年の「二月頃執筆され、二月十九日伊豆に発つまでに脱稿した」と推測し、約1ヶ月で完成されていた。

以上のように、太宰は3作を休むことなく、筆を取り、書き続けていたことになるが、いくら何でもこんなに集中し、発表できたことは大変なことであるだろう。その理由として考えられるのは家庭と作家活動が安定できていたことも一つの理由として挙げられる。論者が最初注目を引いたことは3作の題名からであり、3作の始発である「ヴィヨンの妻」をどういう点から《力作小説》であると自負し、書いていたかという疑問から始め、3作の共通点をまとめ、考察していく。

## 1.1 同時代評論

高見順<sup>4)</sup>は「ヴィヨンの妻」において昭和22年3月の発表直後、次のように言及していた。

……「ヴィヨンの妻」(展望)にも冒険の戦りつが無い。佳作には相違ないが、お家の芸的安易さである。太宰ならではの深えん的なものをのぞかせはするが、それを安直に売ってゐる。書ける人なのだ。日本文学の為にどつしりとした仕事をしてほしい。

太宰は《力作作品》として自負していたにも関わらず、日頃、太宰の大ファンであった彼すら《安直》に書かれ、ちゃんとした《仕事をしてほしい》と指摘している。和井幀<sup>5)</sup>は《戦後の仕事をみても「嘘」「親友交歓」「父」「ヴィヨンの妻」等は何れも佳作である》と言及し、臼井吉見<sup>6)</sup>も《冷たい戦慄の美》が描かれていると述べている。学者らの私見は

2) 山内祥史(1990)「解題」『太宰治全集』第8巻、筑摩書房

3) 前掲書(2)

4) 高見順(1947)「生命の浪費文芸時評②」『東京新聞』に掲載され、山内祥史(1997)『太宰治著述総覧』東京堂出版、p.22 による再掲載、以下省略する。

5) 和井幀「異端の文学」『東北文学』第2巻第9号・前掲書(4)

6) 臼井吉見「太宰治論」『展望』第32号・前掲書(4)

色々なはずではあるが、特に平田次三郎<sup>7)</sup>の《「ヴィヨンの妻」斜陽》において描出された現代人の苦悩が、読者の魂の何ものかと照応している》というところに論者は注視したものである。「母」の同時代批評は見当たらず、「父」の批評の中では次のような論説が目についた。

いづれにせよはや古臭いマンネリズムで、悪臭粉々たるものだ。誠実な反省のやうに見えて実は不誠実極まるもの、怠惰なる雑文ではなからうか。私にはどうも、作者自身が寝ころんで唾をはきながら悪態をついてゐるものゝやうに思はれる。自分を軽蔑するよりも文学を侮辱し、読者を侮辱してゐるやうに見える。それは作者自身の(実存)の姿だといふかも知れない。<sup>8)</sup>

太宰はそんなに誉めてもらう作品ではないと書簡に出しているわけではあるが、《読者を侮辱してゐる》ほど作品度が落ちているとは思っていない。安定した生活の中で、地道に短期間で作品を書き続け、《力作小説》を書こうとしただけである。

## 1.2 問題提示と研究目的

宮原昭夫<sup>9)</sup>は《「ヴィヨンの妻」は、作者自身の世界をあきらかに踏み台としながらも、奇しくも太宰自身の呪縛から逃れ出て、それを超えた地点で生れた最高傑作と言うことができる》と言及し、松本健一<sup>10)</sup>は次のように述べている。

『ヴィヨンの妻』などのあの意志と感情の全く無い、風の透るような異様に軽い言葉遣い、後期の作品のほとんどにみられる、タッチの軽さ、抵抗の無さ、そして部分部分に天才的な感覚のひらめきを見せながら、全体的に何か投げやりを思わせる構成、これは全く常人の書いたものではありません。

ある人には《最高傑作》であり、《天才的な感覚》であつたり、ある人には《不幸な書物》<sup>11)</sup>として読まれ、興味深かった。作品を読んで感じ取るのは人それぞれであり、疑問

7) 平田次三郎「中堅作家論(上)-太宰・丹羽・石川淳・井伏-」『夕刊新大阪893号』-前掲書(4)

8) 石川達三「自嘲小説6号雑記」『文学界』第10巻 複刊号-前掲書(4)

9) 宮原昭夫(1976)「ヴィヨンの妻」考」『国文学解釈と教材の研究』第21巻6号、学燈社

10) 松本健一(1982)『太宰治とその時代』第三文明社、p.215

11) 田辺 保(2000)「ヴィヨンと太宰治」『太宰治研究』第9巻、和泉書院

に思わない。

ところが、太宰が自負している《力作作品》をどういう形態で解釈した上で、《苦悩》の読みを考察していくかが問題であると思う。それから、＜大谷＞と＜私＞の死においての意味解釈と《神》を受け入れる姿勢の違いなどを《苦悩》とともに考えたい。また、奥野健男<sup>12)</sup>は「母」は《敗戦後の俄かづくりの民主主義を》《皮肉たつぷり風刺》されていると指摘しているが、男女が一夜を過ごしたことへの正確な言及がないことに注目した。最後作の「父」は《太宰治が、父親として子供に書きのこした遺書と見ることができる》<sup>13)</sup>と指摘され、いつものように太宰が投影化されていると読んでいる。これを考察した上、父が戦っている《義》と重ねて進め、《《苦悩》が浮かび上がらせ》<sup>14)</sup>られているかなどへの再解釈となり、研究目的になるだろう。

## 2. 主人公から見られる父母像

### 2.1 自己中心の父像

戦後、太宰は「冬の花火」「斜陽」「ヴィヨンの妻」「男女同権」など、女性をよく書き入れ、作品化していることは周知のことである。というわけで、《「死」と「女性」》は《太宰論の重要なテーマ》<sup>15)</sup>になると言え、女性像はよく指摘される部分である。ところが、太宰において父、母というテーマも重要なネタとなり、森安理文<sup>16)</sup>が指摘しているように、《太宰にとって「父」は家と権威の象徴であるが故に戦わねばならぬ対象》であり、《「母」は平和と郷土の休憩所である》だろう。しかし、太宰は実際に父と母に親しむことなく、遠いところから見つめるぐらいの関係から《肉親を仮想敵》として認識していたかも知れない。論者はあの論説から離れ、作品の父母像を再解釈し、作品における《苦悩》を読み直し、その意味を読み返す。

はじめに、「ヴィヨンの妻」での＜大谷＞は基本的に父であり、旦那であるにも関わら

12) 奥野健男(1957)『太宰治論』近代生活社、p.170

13) 小野正文(1971)『太宰治をどう読むか』サイマル出版会、p.143

14) 安藤 宏(1988)『「ヴィヨンの妻」試論』『国文学解釈と鑑賞』第684号、至文堂

15) 三好行雄編(1980)『太宰治必携』学燈社、p.50

16) 森安理文(1977)「太宰治における「父」と「母」」『国文学解釈と鑑賞』第548号、至文堂

ず、《殆ど家に落ちついてゐる事は無く》女性と遊ぶことしか関心がない人であった。

……三晩も四晩も帰らず、古くからの夫の知合ひの出版のはうの方が二、三人、そのひとたちが私と坊やの身を案じて下さつて、時たまお金を持つて来てくれますので、どうやら私たちも飢え死にせずにはけふまで暮してまゐりましたのです。  
(「ヴィヨンの妻」、p.25)

<大谷>は一家の柱として家庭には責任は持たずに、家族を回りの人に援助させっぱなしのままであった。女房の<私>はバイト先で彼の立て替えをしている中、次のような話を聞く。

ご亭主の話に依ると、夫は昨夜あれから何処か知合ひの家へ行つて泊つたらしく、それから、けさ早く、あの綺麗な奥さんの営んでゐる京橋のバーを襲つて、朝からウキスキイを飲み、さうして、そのお店に働いてゐる五人の女の子に、クリスマス・プレゼントだと言つて無闇にお金をくれてやつて、……  
(「ヴィヨンの妻」、p.30)

こういう突飛な行動と考え方で回りの人に迷惑をかけている<大谷>のことを《廢滅的「貴族」》として表象化された<sup>17)</sup>とも言える。<大谷>は家の柱であることを放棄したまま、自分の思うままに生きている自己中心の人であり、《廢滅的「貴族」》となり得ただろう。

次作「父」の<私>の様子を見てみる。日頃の<私>は《私さへゐなかつたら、すくなくとも私の周囲の者たちが、平安に、落ちつくやうになるのではあるまいか》と思いつつ、暮している人であった。《親が有るから子は育たぬ》と勝手なことを思い込み、父としての責任も感じられず、次のようなことまでやっている。

子供のおやつ、子供のおもちや、子供の着物、子供の靴、いろいろ買はなければならぬお金を、一夜のうちに紙屑の如く浪費すべき場所に向つて、さつさと歩く。これがすなはち、私の子わかれの場なのである。出掛けたらさいご、二日三日も帰らない事がある。父はどこかで、義のために遊んでゐる。地獄の思ひで遊んでゐる。いのちを賭けて遊んでゐる。(「父」、p.50)

父である<私>はいつも飲酒を楽しみ、《いゝ加減》に筆を取っている作家であった。しかし、自分がやっていることは《義》のためであると《意地》を張っている。こういう父をどう読んでいけばいいだろうか。菊田義孝<sup>18)</sup>は《彼自身の苦闘》と戦っていることで

17) 伴悦(1983)「ヴィヨンの妻」論『国文学解釈と鑑賞』第48巻 9号、至文堂

あり、その《苦闘》を松本健一<sup>19)</sup>は《他の人間といっしょに生きてゆくこと》《難事、辛さに耐えて、「父」は息もたえだえに生きて》いる父のことと繋げている。

要するに、父は責任を持とうともせず、責任回避の人であっても、《辛さに耐え》ている父像であり、《辛さに耐え》れば《義》に待たされていることになる。しかし、自己慰安だけを気にし、責任を持とうとしていなかったことから自己中心の人であったことは間違いないだろう。こういう父像から戦後《新しい時代の到来》を期待していたにも関わらず、何も変わっていないことへの《絶望へと転化》<sup>20)</sup>し、皮肉を父像で現わそうとしていたのではないかと考えた。太宰はこういう父像を通じて、絶望を表現し、そこから来る《苦悩》を感じていただろう。

## 2.2 《涙》の母像

戦後の太宰は《優しい母性的な女性》と《既成道徳を破壊して生きようとするアナーキーな女性》、それから、《残忍性やヴァイタリティ》<sup>21)</sup>のような女性をよく描いていると指摘されている。「ヴィヨンの妻」では存在だけの旦那と結婚生活をしている家内である〈私〉の様子から何とか生きていこうとした《生命力》<sup>22)</sup>のある《アナーキーな女性》として読まれていた。家庭の柱である旦那は何もせず、〈私〉は主婦や母としても責任感を持ち、労働で返している。《「ヴィヨンの妻」は、その女装と独自の二つともが、女の労働とレイプという極めて社会的な出来事を物語内容とすることによって貫徹不能となり、かえってその枠組みのゆるやかさによって現在にも通うジェンダー構成の矛盾に触れ》<sup>23)</sup>ていえるだろう。

次は「母」の〈女中〉の様子を見てみる。《四十前後の、細面の薄化粧した女中》が《日が暮れたら、濃い化粧をして口紅などもあざやかに、》し、接待している。〈私〉は初対面の時、〈女中〉の《声》が《悪くない》ことが気に入り、すごく満足し、自分の傍で付き添ってくれたら、それがそれで喜びであり、《聖母》なる〈女中〉であった。しかし、そんな彼女が若い男と一夜を過ごしたことは彼にとっては大変なショックであっただろう。

18) 菊田義孝(1970)『太宰治研究臨時増刊号』審美社、p.62

19) 松本健一(1982)『太宰治とその時代含羞の人』三文明社、p.251

20) 渡部芳紀(1977)「評伝・太宰治」『国文学解釈と鑑賞』第42巻 第14号、至文堂

21) 三好行雄編(1980)『太宰治必携』学燈社、p.50

22) 前掲書(21)

23) 江種満子(1999)「「ヴィヨンの妻」－妻の「私」」『国文学解釈と教材の研究』第44巻 7号、学燈社

《帰還の航空兵》との出来事によって、彼女は《聖母》でなくなり、井上諭<sup>24)</sup>は次のように指摘している。

もともと売春行為を期待してここに宿泊したということである。…(中略)…この露骨に性的な興味が、夜半の隣室での会話を聞くことによってむしろ「聖なる母」への憧憬に昇華するところがこの小説の眼目である。

《ひとりで寝かされ》、《ふと、眼をさました》<私>は《帰還の航空兵》と<女中>が一夜を過ごしたことに気がつく。さらに、彼のお母さんと彼女の年が同じ年であることが分かる。その話を聞いた<女中>は《はつと息を呑》み、《「あしたは、まつすぐに家へおかへりなさいね。」》と話しかける。<私>も《帰還の航空兵》のように女を買いに来ていることとなるが、問題はそれではないと思う。注目すべきところは自分のことを売りに来ている彼女のことである。<女中>は酒と人の接待を商売している人であり、もう38才であった。いくら軍服を着ていても、《帰還の航空兵》の外貌から見たら、自分より若いかどうか十分に分かるはずである。仕事であるため、一夜をともにした二人が夜明けふと目が合っただろう。ちらと見た彼の様子はどうかであっただろうか。女として納得できなかったのではないだろうか。だから、<女中>は彼ががっかりしていることを、母のことで心配していると思い込み、母の年を聞いたのではないだろうか。<女中>はわざと年齢をきいたわけになる。<私>が女を買いにこようが、《帰還の航空兵》が女を買いに来ようが、<女中>が売春をやっていることは確かであった。こういう<女中>に《聖母を、あかみに引き出すな！》と話しかけたことは、<私>としては無理のあった話であり、《母の愛の遮断》<sup>25)</sup>から来ているということは無理のある指摘であるだろう。<女中>の存在を《自己同一性・連続性を保証するもの》<sup>26)</sup>として読むより、《聖母》でなくなっていることへの彼の《苦悩》が描かれていると思ったらどうだろうか。

3作目の「父」の家内の様子を見て見る。奥さんのことをもう<家の者>であると、はっきりと書き、二人の関係が最初から分かる部分であるだろう。

ことしの正月、十日頃、寒い風の吹いてみた日に、  
「けふだけは、家にゐて下さらない？」と家の者が私に言った。

24) 神谷忠孝、安藤宏編(1995)『太宰治全作品研究事典』勉誠社、p.239

25) 佐古純一郎(1992)『太宰論究』朝文社、p.327

26) 東郷克美(2001)『太宰治という物語』筑摩書房、p.246

「なぜだ」

「お米の配給があるかも知れませんか。」

「僕が取りに行くのか？」

「いいえ。」

家の者が二、三日前から風邪をひいて、ひどいせきをしてゐるのを、私は知っていた。その半病人に、配給のお米を背負はせるのは、むごいとも思つたが、しかし、私自身である配給の列の中にはひるのも頗るたいぎなのである。

「大丈夫か」

と私は言つた。

「私がまゐりますけど、子供を連れて行くのは、たいへんですから、あなたが家にいらして、子供たちを見てみてください。お米だけでも、なかなか重いんです。」家の者の眼には、涙が光つてゐた。

(「父」、p.51)

《背中にひとりおんぶして》、《おなかにも子供》がいて、《もうひとりの子の手をひいて》いる、風邪ぎみの彼女は主人である<私>の家内である。家内は体の調子が悪く、頼れない主人であっても、子供の面倒を見てほしがっている。それが無理であるなら、せめて留守番だけでもよかったのである。主人は十分<家の者>の気持ち、体の具合を知っているにもかかわらず、<家の者>が《涙》まで流していたにもかかわらず、小為替を振じ込み、家を出た。《子供を残して、いそぎ足》でその場を離れてしまったのである。家内が《涙》を流す結婚生活、家庭であるならば、その家庭は《憂鬱》であることが推測できよう。家内も《涙》染みた生活からの《苦悩》はあるはずであつた。

実際の太宰は貧弱の母の代わりに乳母タケのもとで育てられ、父のことを怖がり、権威の象徴として認識していた。小さい時から父母の暖かい愛情ということに触れられずに育てられたことから、不安定な家族、不安定な父母像を幼い時から抱えていたかも知れない。その影響で弱い父母像が描かれている可能性もあるはずである。父らは厄介な存在となり、子供と家族に迷惑をかけ、養っていく能力や気持ちすら持っていない。闇の中から家族を守ろうとしたのは家内だけであつた。だからこそ、彼女は縛られた《苦悩》と煩悶というのを堪えていたとも考えられる。

要するに、《「親のはうが弱い」という言葉は、いつの時代にあつても通用しない倫理》ではあるが、《「戦後」という時代には、子供と女性が弱い存在であり、かれらを保護し、「家庭」を守ることが民主主義的な社会道徳》<sup>27)</sup>として読んでもいいだろう。しかし、否定

27) 前掲書(25)、pp.254-255



的な父像の《苦悩》とは違いがあるのは確かである。父であれ、母であれ、彼らなりの《苦悩》を抱えた上、父像は相手に頼れる存在ではなくなっていることから、《既成の秩序に反逆》<sup>28)</sup>として父母像を描こうとしたのではないかと考えた。彼らの《苦悩》には《道德革命》の《挫折》<sup>29)</sup>が隠され、唐突な秩序破壊であり、これが太宰が改革しようとした《苦悩》の意味であっただろう。

### 3. 《苦悩》から見えてくるもの

これから、太宰が《革命》の《苦悩》抱えの彼らから何を探し、そこから何を探ろうとしようかを考えてみる。太宰の《苦悩》の奥底に、人間不信と人間恐怖との苦しみが横にたわって《苦悩を隣人への愛》として《道化の倫理》<sup>30)</sup>が描かれていると指摘された上、次の本文を読んでみる。

夫は、黙つてまた新聞に眼をそそぎ、  
 「やあ、また僕の悪口を書いてゐる。エピキュリアンのにせ貴族だつてさ。こいつは、当つてゐない。神におびえるエピキュリアン、とでも言つたらよいのに。さつちやん、ごらん、ここに僕のことを、人非人なんて書いてゐますよ。違ふよねえ。僕は今だから言ふけれども、去年の暮にね、ここから五千円持つて出たのは、さつちやんと坊やに、あのお金で久し振りのいいお正月をさせたかつたからです。」  
 私は格別うれしくもなく、  
 「人非人でもいいぢやないの。私たちは、生きてゐさへすればいいのよ。」  
 と言ひました。 (「ヴィヨンの妻」、pp.35-36)

とりあえず注目すべきところは《人非人》の意味と意識に対することである。《人非人》の辞典語は、人ではあるが、人ではない人のことである。人ではない人のことは何であるだろうか。神であるだろうか、死者であるだろうか。菊田義孝<sup>31)</sup>は次のように指摘している。

28) 奥野健男(1984)前掲書(12)、p.146

29) 内海紀子(2011)「『桜桃』論-占領下の<革命>」『太宰治研究』第19号、和泉書院

30) 佐古純一郎(1963)『太宰治論』審美社、p.107

31) 菊田義孝(1970)「『人非人』の世界」『太宰治研究臨時増刊』審美社

人非人とは、どういうものだろうか。人にあらざる人、人間らしさを持たない人間、人間らしく生きようとする望みや意志さえ持たない人間、それが人非人というものであろう。人間らしさ、人格、道徳、そんなものを、真実のところ持たないのは、なにも大谷ばかりではない。そのことも知っている。人間の世界全体が、もぬけの殻だ。人間らしさというものが、抜け出してしまったあとの抜け殻だ。

人間らしさのない《抜け殻》<大谷>は自分のことを《人非人》であり、恐怖をいつも胸の中に隠していると言っていた。彼の様子から《敗戦後の日本が抱えていた<男らしさ>の挫折》<sup>32)</sup>が見えてくると指摘されているが、どうであるだろうか。人格のない詩人で、大衆から《人非人》であると言われている自分のことを。《貴族》の《人非人》である自分は《五千円持って出た》癖悪い人ではあったが、家族に《いいお正月をさせたかったから》と、胸を張っている。《貴族》としては格好悪い行動であったかもしれないが、《貴族》であれ、《人非人》であれ、父として旦那としては家の柱の役割はしっかりとしていると強調している。この行動から《人非人》の<大谷>は罪は犯してはいるものの、それが償われたことになる。ところが、妻は《「人非人でもいいいちやないの。私たちは、生きてゐさへすればいいのよ。」》と、旦那がどんな人であってもよかったのである。<私>は彼のことを本気で受け入れず、向き合おうとしていなかった。《生きていくことのかなしさに向けられ》<sup>33)</sup>でも、生きていることだけでよくて、相手はどうでもよかった。

### 3.1 「ヴィヨンの妻」における《神》

《苦悩》抱えの夫婦二人の会話に出てくる《神》について考え、それが《苦悩》とどういう関係をもつか検討してみる。まず、旦那<大谷>にとっての《神》はどのような意味が与えられているか、次の引用文を読んでみる。

「僕はね、キザのやうですけど、死にたくて、仕様が無いんです。生れた時から、死ぬ事ばかり考へてゐたんだ。皆のためにも、死んだほうがいいです。それはもう、たしかなんだ。それでゐて、なかなか死ねない。へんな、こはい神様みたいなのが、僕の死ぬのを引きとめるのです。」  
(「ヴィヨンの妻」、p.32)

32) 光石亜由美(2006)「「ヴィヨンの妻」-私は生きるから、あなたは どうする?-」『太宰治をおもしろく読む方法』風媒社

33) 鈴木いづみ(1977)「生きることのかなしみ『ヴィヨンの妻』」『月刊ポエム』すばる書房、p.63

旦那は日頃から《死にたくて、仕様がな》人であっても、なかなか死なずに、食べて飲んで、仕事までしっかりとしていた。さすがに彼が死ぬことをいつも頭の中に入れていた人であつたろうか疑問に思われる。普通、死を選択せずに居られない人ならばどういうことを考え、行動をとるだろうか。どうせ死ぬならば思いっきり遊んで食べるタイプの人がいるなら、何も食わず、せずついてのタイプの人がいるだろう。しかし、本作での旦那は死のうと思いつつも、なかなか死ねないタイプの人であつた。言い換えれば、なかなか死なない、死のうとしない、口だけでは死にたいと言いつつ、本当に死のうとはしなかったのである。＜大谷＞はただ死という言葉に、死の先に生きている《神》に甘える弱い人間に過ぎない人であつた。角田旅人<sup>34)</sup>は次のように指摘している。

「ヴィヨンの妻」の中で、詩人大谷は妻である椿屋のさっちゃんに、＜死にたくて、仕様が無いんです。＞と言い、＜皆のためにも、死んだほうがいいんです。＞と言う。大谷はこの時、身に引き受けるべき「罪」のことを語っているのだと理解してよいだろう。生への恐怖感と罪意識に捕らわれている彼であつた。罪を償うには「死」しかない。それが大谷のオブゼッションとしてある。しかし大谷はその「死」を引き留めるものを、「神」というもののような形で自分の内部に感受している。従って「償い」をなしうる道はふさがれ、その可能性も全くない。「罪を犯している」という場、すなわち＜人非人＞であり、＜人非人＞として生き続けるほかない。

頭では死のうと思つていても、なかなか実行が出来なくて、そこから来る自分の存在感は《人非人》であり、《苦悩》があつたはずである。《大谷の像は＜儀＞に拒まれた無頼派の姿》<sup>35)</sup>であることより、彼にとっての《神》は死が乗り越えられる甘えられる存在であり、甘えてもらえ、その存在から耐えられない《苦悩》を楽しんでいただけであつた。

次は女房である＜私＞における《神》について考えてみる。日頃の＜私＞はきれいにして待つていても、可愛がってもらふ旦那も傍になかなか居なく、食べていくことで精一杯であつた侘しい一日を送つていた。旦那の借金返済で中野の椿屋で働きはじめてから《今までとはまるで違つて》《浮々した》一日に変わり、《髪の手入れ》をし、化粧をし、《着物を縫い直し》て、出勤してゐた。こうした生活は《これまでの胸の中の重苦しい思ひが、きれいに拭き去られた》ようであり、仕事場で旦那に知らない女性と同伴されても、焼きもちはず、なんともなくなつてゐた。ある日、＜私＞は次のように旦那に話す。

34) 角田旅人(1988)「『ヴィヨンの妻』について-宿命としての「人非人」の誕生」『太宰治』第4号、洋々社

35) 三好行雄(1974)「『ヴィヨンの妻』」『作品論太宰治』双文社出版

「なぜ、はじめからかうしなかつたのでせうね。とつてもわたしは幸福よ。」

「女には、幸福も不幸も無いものです。」

「さうなの？さう言はれると、そんな気もして来るけど、それぢや、男のひとは、どうなの？」

「男には、不幸だけがあるんです。いつも恐怖と、戦つてばかりゐるのです。」

「わからないわ、私には。でも、いつまでも私、こんな生活をつづけて行きたうございます。…

(中略)…」

「仕事なんてものは、なんでもないんです。傑作も駄作もありやしません。…(中略)…おそろしいのはね、この世の中の、どこかに神がある、といふ事なんです。あるんでせうね？」

「え？」

「あるんでせうね？」

「私には、わかりませんわ。」

(「ヴィヨンの妻」、pp.31-32)

雇用され、働くことは雇い主や客の眼を気にしながら、気を遣うことでややこしく、たいへんなことであるにもかかわらずに＜私＞は椿屋で働きはじめ、10日、20日経っているうち、この生活に馴れ、楽しんでいた。起床して仕事場に行きたくないとぶつぶつと呟いているのではなく、気持ちよく朝を迎え、彼女の様子は耀いていた。世間知らずの＜私＞が《暗いところが一つも無くて生きて行く事は、不可能》なことに気づき、女性として生まれ変わり、世の中と向き合っていたのである。

そんな中、＜大谷＞が《神》は自分の回りに存在し、死を引き留めていると思っていることと違って、＜私＞は生きることで精一杯であったためか《神》はどうでもいいと思っていた。ところが、《お客にけがされ》たあと、《神があるなら、出て来て下さい》といきなり怒鳴りはじめ、《神》を求め出した。彼女はだれに向かって怒鳴っていたらうか。＜私＞が旦那の知り合いであると名乗られるある男にレイプされ、自分の身体を守ってくれなかった《神》様への怒鳴りであつたらうか。＜大谷＞は日頃、旦那の愛に触れることがなく、逆に旦那に堂々にほかの女性と不倫を犯されている。これは家内としてではなく、一人の女性としてもどれほど卑屈であつたらうか。それに対して、一言の文句も言わず、女性としての人生は諦めているように黙々と母として生きていただけであつた。だからか、＜私＞はバイト先で旦那の知人であると名乗られる男性に家まで送ってもらう。ここで考えてみたいことは、普通の女性ならば夜中、知らない人に送ってもらえるかである。雨に降られながら、あかちゃんをおんぶして帰るか、送ってもらえるかであるが、人それぞれの思考であり、選択ではあるが、あかちゃんをおんぶして帰る母の方がもっと多いと思う。危ない選択をした＜私＞はあの男に雨宿りさせてもらいたいという無理のある言

い訳を聞いてあげたのは単なる雨宿りだけの問題ではないと思った。結果が見えるレイプはひょっとしたら、されずに済んだはずであり、見逃せない結果であり、絶対に危ない行動であった。

言い換えれば、＜私＞は《神》に向かって怒鳴ったのではなく、自分に向かっての怒鳴りであり、叱責であっただろう。しかし、この契機から隠されている女性性が生き返されたと言えるのも過言ではない。彼女にとって《神》の存在は信じる、信じないの問題ではなく、女性として復活ができた大事な存在であり、世の中と向き合える架け橋であった。

### 3.2 「父」における《義》

家内は旦那に子供3人を連れて配給に行くのは無理だから《「けふだけは、家にゐて下さない？」》と心からお願いしても、飲み屋の女中とすらりと家を出る。その様子を見た子供は外で遊びながら、いつものことのように無表情と無言でお父さんの顔を見上げる。子供という存在は親からみれば、目に入れても全然痛くない可愛らしい自分の分身であるのに、＜私＞は普通の人と違っていた。出版者から送られてきた原稿料は家に入れずに、飲み屋に行っている。せめて日頃は子供の面倒はしているだろうかと疑問に思われるほど家族のことには全然関心もなく、家内にまかせてばかりの生活であった。そんな＜私＞は《義》のために遊び、生きている人であると胸を張って言っている。

いったい、《義》、《哀しい弱点》に似てゐる《義》というのは何であろうか。小野正文<sup>36)</sup>は《義》のことを《美しい》《永遠の問い》であり、《太宰治自身にとって不可能》なことであると言及し、磯田光一<sup>37)</sup>は《「義」とは、日常性を超えようとする大義名分、あるいは目的意識》であり、《“文学”も“革命”も》《「義」に通じるもの》であると述べている。しかし、それが何であるかは詳しくは触れていない。太宰が《哀しい弱点》の《義》であると言っていることから《義》は何と言われようが、《哀しい弱点》であってほしかっただろう。いくら金持ちであれ、貧乏であれ、幸福であれ、残酷であれ、人間である以上、自分に与えられたことがあるはずである。母であるか、父であるか、学生であるか、先生であるかなど。その役目を精一杯頑張らなければならないのに、何一つ努力もせずに《義》のためであると、言い訳を言っている。父は家庭内ではまるで息が吸えないかのように《義》という言い訳で家から出ようとし、与えられた役目から逃れようと逃げ道

36) 前掲書(13)、p.148

37) 磯田光一(1970)『無頼派の聖地希求-戦後の異端の文学-』『国文学解釈と教材の研究』第15巻1号、学燈社

を探しているだけであった。言い換えれば、《義》とは《生きる者の苦悩》<sup>38)</sup>のうえで、世間や人とぶつかり、やっと気づく彼なりのプライドではないだろうか。そのプライドというのは父がそんなに強調していた《意地》と重ねて考えればどうであるだろうか。人はどんな人であっても自分なりの《意地》はあるはずである。この《意地》も気持ちよく張っていけば物事に役に立て、自己完成のためのいい影響力の要素となる。《意地》は何かぶつからない限り、止まり、籠っている《哀しい弱点》に似ているものである。人は頭の中では《意地》を気持ちよく振り分けしようと思っけていても、それがなかなか出来ない。だから、そう言っているかも知れないと思う。それが人間であり、人間の名のもとで隠されている本音であるだろう。《意地》がなく、《意地》を張らずにいるなら、本当の自分に出会えない大事な心掛けである。《苦悩》は《神》と《義》がともに共存されることであり、これらとぶつかりながら、生きることが本当の人生であるだろう。《精神の幸福、精神の豊かさを強調して》<sup>39)</sup>いく上、《苦悩》は《意地》が張れることであるだろう。

#### 4. おわりに

以上のように「ヴィヨンの妻」と「母」「父」の登場人物における《苦悩》に関して再解釈してみた。貧困生活の中で夫婦らは幸福とは言えない、見えない、感じられない家族であり、父であり、母であった。金銭的なことでも豊富であるとは言えず、精神的なことでも豊富ではなかった。父は父としての知覚もなく、自己中心の持ち主であった。そのせいで家内は《涙》を流す日常生活をしていた。こういう父母像から、彼らなりの《苦悩》を抱えていることが分かった。自分のことを否定した父、死のうと言いながら、死んでいない父、《聖母》でなくなっていることへの煩悶の《私》。それから、女としてみてもらえない女性としての悲鳴や自分の人生に疲れている家内の様子などがその《苦悩》であった。

この《苦悩》抱えの彼らが精神的に弱い存在であり、世間と向き合おうとしていないことから前代未聞の《革命》的な人間像、いわば父母像を通じて、世の中を否定しようとした上で、《革命》的な人を探ろうとしたことが分かった。《革命》的な人間像は《苦悩》の先に共存している《神》と《義》が戦われ、まさに《苦悩》には《神》と《義》が生かされたことになる。《革命》的な人間像とは《苦悩》を乗り越え、《意地》を隠さず、

38) 菊田義孝(1970)『太宰治研究臨時増刊号』審美社

39) 渡部芳紀(1984)『太宰治心の王者』洋々社、p.288

《意地》を張っていく人のことであっただろう。これが、《精神の幸福》言い換えれば、人の《幸福》であり、太宰の《幸福》であり、太宰が伝えようとした《苦恼》の意味であっただろう。

## 【参考文献】

- 太宰治(1963)『太宰治全集第8巻』『第9巻』『第11巻』筑摩書房  
 内海紀子(2011)「『桜桃』論-占領下の<革命>」『太宰治研究』第19号、和泉書院  
 奥野健男(1957)『太宰治論』近代生活社、p.170  
 小野正文(1971)『太宰治をどう読むか』サイマル出版会、p.143  
 角田旅人(1988)「『ヴィヨンの妻』について-宿命としての「人非人」の誕生」『太宰治』第4号、洋々社  
 神谷忠孝 安藤宏編(1995)『太宰治全作品研究事典』勉誠社、p.239  
 菊田義孝(1970)「『人非人』の世界」『太宰治研究臨時増刊』審美社  
 佐古純一郎(1963)『太宰治論』審美社、p.107  
 田辺 保(2000)「ヴィヨンと太宰治」『太宰治研究第9巻』和泉書院  
 東郷克美(2001)『太宰治という物語』筑摩書房、p.246  
 服部康喜(1995)『太宰治事典』学燈社、p.85  
 松本健一(1982)『太宰治とその時代』第三文明社、p.215  
 光石亜由美(2006)「『ヴィヨンの妻』-私は生きるから、あなたは どうする?-」『太宰治をおもしろく読む方法』風媒社  
 三好行雄(1974)「『ヴィヨンの妻』」『作品論太宰治』双文社出版  
 山内祥史(1990)「解題」『太宰治全集』第8巻、筑摩書房  
 \_\_\_\_\_(1997)『太宰治著述総覧』東京堂出版、p.22  
 渡部芳紀(1984)『太宰治心の王者』洋々社、p.288  
 \_\_\_\_\_(2006)『文学探訪太宰治』NHK出版、p.201  
 安藤宏(1988)「『ヴィヨンの妻』試論」『国文学解釈と鑑賞』第684号、至文堂  
 磯田光一(1970)「無頼派の聖地希求-戦後の異端の文学-」『国文学解釈と教材の研究』第15巻 1号、学燈社  
 江種満子(1999)「『ヴィヨンの妻』-妻の「私」」『国文学解釈と教材の研究』第44巻 7号、学燈社  
 鈴木いづみ(1977)「生きることのかなしみ」『ヴィヨンの妻』『月刊ポエム』すばる書房、p.63  
 鈴木晴夫(1969)『国文学解釈と鑑賞』第420号、至文堂、p.97  
 伴悦(1983)「『ヴィヨンの妻』論」『国文学解釈と鑑賞』第48巻 9号、至文堂  
 宮原昭夫(1976)「『ヴィヨンの妻』考」『国文学解釈と教材の研究』第21巻 6号、学燈社  
 森安理文(1977)「太宰治における「父」と「母」」『国文学解釈と鑑賞』第548号、至文堂  
 渡部芳紀(1977)「評伝・太宰治」『国文学解釈と鑑賞』第42巻 第14号、至文堂

---

논문투고일 : 2019년 06월 20일  
 심사개시일 : 2019년 07월 17일  
 1차 수정일 : 2019년 08월 09일  
 2차 수정일 : 2019년 08월 13일  
 게재확정일 : 2019년 08월 16일

---

---

 <要旨>
 

---

## 太宰治の《苦悩》の再解釈

- 「ヴィヨンの妻」と「母」と「父」を中心に -

金奈炅

本稿では「ヴィヨンの妻」と「母」「父」における彼らの《苦悩》に関して再解釈してみた。父は父としての知覚もなく、自己中心の人であり、家内は《涙》を流して暮らしていた。こういう父母像から、彼らなりの《苦悩》を抱えていることが分かり、精神的に弱い存在であり、世間と向き合おうとしていないことから《革命》的な人間像を通じて、世の中を否定しようとしたことが分かった。だから、彼らは《苦悩》と戦っていくしかなく、《神》と《義》というフレーズにその《苦悩》が無くなると思った。《革命》の先の《苦悩》には《神》と《義》が生かされ、《苦悩》を乗り越えれば、《精神の幸福》言い換えれば、人それぞれの《意地》が隠されていたことが分かった。この《意地》を隠さず、《意地》を張っていくことが人の《幸福》であり、太宰の《幸福》であった。

## Dazaifu's 《reinterpretation》

- It focuses on 「Villon's wife」, 「mother」 and 「father」 -

Kim, Na-Kyung

In this article, we re-interpret them in “Villon's Wife,” “Mother,” and “Paternal.” My father was a self-centered man without fatherhood, and my wife lived in tears. From these images of parents, I could see that they had their own suffering, and that they had tried to deny the world through their revolutionary images, because they were mentally weak and were not willing to face the world. So they felt that they had no choice but to fight against it, and that the phrase “God” would disappear. It was found that God and the righteousness had been used before them, and in other words, each man's own was hidden. It was man's (happiness) and the Dazai's (happiness) to keep this.